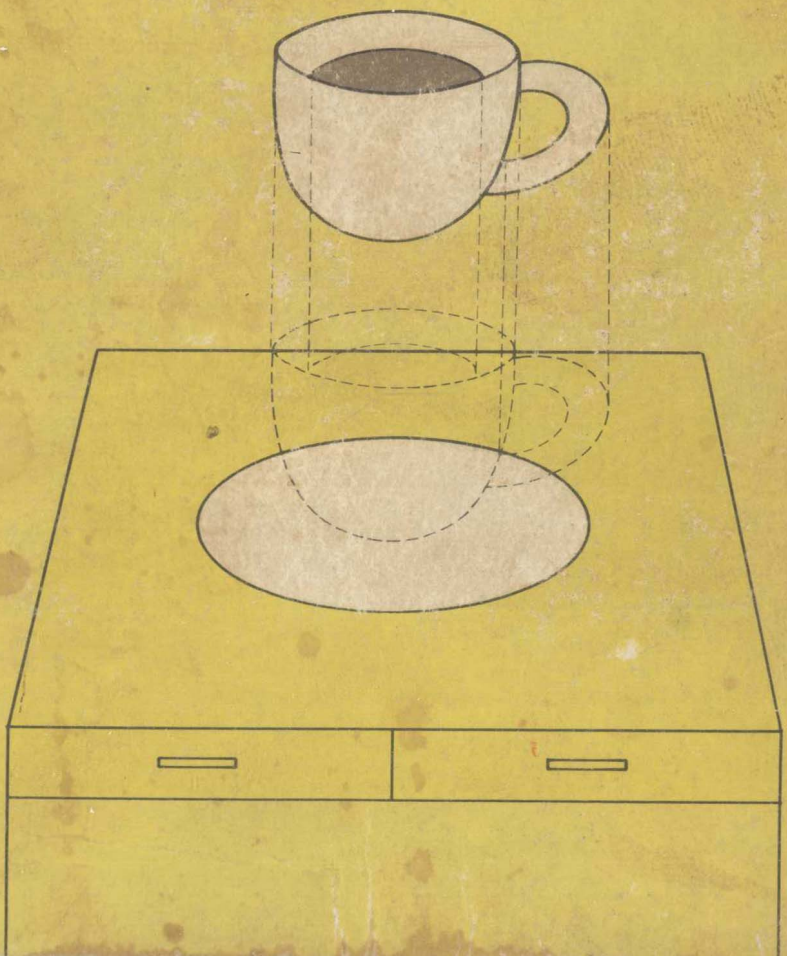
怨霊の国

小松左京



怨霊の国

小松左京

角川書店

怨霊の国

昭和47年5月30日　初版発行

定価690円

著　者　小松左京

発行者　角川源義

発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号102
電話（東京）(265)7111(大代表) 振替東京 195208

暁印刷・宮田製本

©Printed in Japan

0093-872114-0946(0)

目次

霧が晴れた時　七
保護鳥　三
安置所の碁打ち　五一
怨霊の国　六九
写真の女　一一三
女の手　一四五
失神時代　一七一
大混線　一九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

笹の花　二〇七
靴屋の小人　二三一
かつがれ屋　二三七
人の波　二五五
幸福にも不幸にもならない手紙　二七一
知恵の木の実　二八五

怨霊の国

——小松左京作品集——

霧が晴れた時

連休だったが、その前に仕事がつまりすぎて疲れていたので、泊りがけの旅行はしない事にした。どうせ大勢の人たちが出かけるし、どこへ行っても満員なのは眼に見えている。

そのかわり、夏には、つみたてをしておいて、家族ぐるみどこか安く行ける地域へ、海外旅行へつれて行ってやる、という事で、子供たちは納得した。

といって、折角の青葉の季節を、家でごろごろしてばかりいるのも芸がないので、日がえりで近郊の山へハイキングに行く事にした。ここなら連休でも人がおしかけるようなこともあるまい、と見当をつけられるような穴場を知っていたのである。——そして、出かけてみると、果して私の予想はあたっていた。郊外電車で都心からはなれ、途中駅で支線にのりかえると、電車はがらあきで、最近のやたらに大型化したレジャーに殺到する人々は、こんなささやかなハイキングコースには、眼もくれないようだった。

電車はやがて、新緑に包まれた山峡へはいりこみ、そのまま乗りつづければ、終点の、あまりパッとしない温泉街につくはずだった。古くからの近郷の保養地だが、都会からあまり近すぎて

かえってとりのこされてしまっている。最近では熱泉も出なくなってしまい、いよいよさびれて、秋の紅葉と、冬の猪鍋ぐらいがようやく客をひきつけている。その街へつく、二つ手前の駅でおりて、私たちは駅のすぐ前にそびえ立つ山肌を見上げた。

「峠をこえて十五キロだね」

と、中学二年になる息子が、地図を見ながらいった。

「いい空気だこと！」と、妻は若やいだ声でいって胸をふくらませた。「若葉のにおいがするわ」

「道はけわしいの？」と小学校六年の娘がきいた。「やっぱり古い靴にすればよかったな。靴ずれができたらやだな」

「でも、あっちの運動靴は底が破れかかってたわよ」と妻。

「ゆっくり行くさ」私はいった。「鳥の声でもききながらね」

女子供をまじえて、五時間半から六時間と私はふんでいた。私自身、山歩きはひさしぶりだったから、のぼりは時間をかけるつもりだった。峠まで、小休止をふくめて二時間ちょっと、できれば峠をこえて尾根に出た所で昼食にしたい。尾根づたいに少し行った鞍部に、気持のいい草原の斜面があったはずだ。あそこで休めば、見晴らしもいい。兎や山鳥の姿も見られるだろう。

休日のせいか、それでも駅前はわりと人通りがあった。晴着を着た、このあたりの若い男女や家族連れが、これは私たちと違い、電車にのって都市へ出かけて行くのだ。山へはいって行くの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は、この駅の手前の方から、キャンプでもするのか、本格的な山支度の若者が二、三人、山歩きになれた足どりでやってきて、私たちをさっさと追いこして行った。だが、私たちはのんびりと、立ちどまって道端の草花をつんだり、お互いの姿を写真にとったりしながら、山道をたどって行った。

駅前からしばらく小さな渓流沿いにたどり、そこからつづら折れの急坂になった。稲妻形に急斜面をのぼって行く山道の曲り角ごとに、下方に見はらしがひらけてきた。

「しずかね」と、妻はあたりを見まわしながらいった。「空気がおいしいわ」

途中、ちょっと天気がくずれるかな、と思わせるような雲行きになった。杉木立が急に深まるあたりで、空が暗くなり、坂の上の方からうすく霧が吐き出されてきた。

「やっぱり冷えるわね」妻は肱にかけていたカーディガンを肩に羽おりながらつぶやいた。「今日一日、いい天気だって、予報で言っていたのに」

その週は変な天気がつづいた。日中やたらに暑くなったかと思うと、朝晩、霜でも降りそうなほど冷えこみ、一日晴れたかと思うと、翌日一日中どしゃ降りになったりした。北の方では、雪さえ降った、という事だった。

中腹にまでのぼる間、小型トラックが一台おりてくるのに出あっただけで、誰にもすれちがわなかった。曲り角に、手ごろな岩が二つ三つころがっている所で、私たちを追いこして行った若者たちが一服していたが、私たちの姿を見かけると、勢いよく腰をあげて、また歩き出した。そ

のころはもう、谷と斜面から吐き出される霧は、彼らの姿をたちまちかくしてしまうほど濃くなっていた。

「少し休もう」と、私は岩の所でいった。「晴れていれば、ここからの見晴らしはとてもいいんだけどね」

「靖子、竜彦、これを着なさい」妻はボストンの中からスウェーターをとり出して子供たちにわたした。「降り出さないかしら。いやね」

霧はもう岩をうっすらとぬらすほど濃くなっており、谷底からさらに濃い、一寸先も見えないほどの灰色の巨大な塊がゆっくりせり上りつつあった。眼前を、こまかい水滴がくるくる舞いながら、層をつくって流れて行く。

「あと一キロちょっとで峠だよ」と、竜彦はハイキング地図を見ながらいった。「茶屋があるって書いてあるよ」

「行きましょうよ」と妻はいった。「こんな所で、濡れたりしたらいやだわ」

「まあお待ち」私は煙草を吸いながらいった。「せめて一服吸わせてくれ。急には降り出しゃしないさ」

降りはしなかったが、再び歩き出した時は、霧の水滴は眼鏡をくもらすほど大きくなり、朦朧と立ちならぶ杉木立の幹はくろぐろとぬれ、葉先には水滴がたまってしたたるほどになっていた。

——この低い山で、こんな濃い霧に出あったのは、はじめての事だった。学生時分から何度もの

ぼり、ほとんどあらゆる季節を知っているつもりだったが。

ぬれた岩角をふみしめて、三十分ほどのぼると、前方の霧の底から、ぼんやりと人家の軒の形があらわれた。近づくにつれ、古風な「お休み処」の旗が、軒先からぐっしょりぬれて、たれさがっているのが見えた。茶屋は私の学生時分のままだった。もちろん代はかわったろうが、草葺きの屋根や、横手の崖から清水を導く筧の有様など、昔のままだった。氷の小旗はまだ出ていなかったが、かわりに色あせたラムネ、サイダーの小旗が軒下にさがり、カタン糸や焼酎の琺瑯びきの小看板など、もう二十年以上そのままだった。

「やれやれ……」妻は肩で息をしながら茶屋の軒先へたたずんだ。「降らなかったけど、服がぐしょぐしょだわ」

「なにか飲みたい」と靖子がはしゃいだ声でいった。「ここでお弁当？」

「霧がはれたら、この先に景色のいい所がある」と私は時計を見ながらいった。「様子を見て、そちらへ行ってみよう。まだ早いから」

思ったより早くついて、まだ正午すこし前だった。——私たちは、軒下の縁台に荷物をおき、あけっぱなしのガラス戸から奥をのぞきこんだ。

「ごめんください」と妻は声をかけた。「こんにちは」

「かまどがあるぞ」と竜彦は叫んで奥へとびこんで行った。「あったまろう」

「これ、竜彦」と私はいった。「ごめんください」

「留守みたいね」と妻はいった。
「どこか近所へ出かけて行ったんだろう」と私はこたえた。「すぐかえってくるさ」
はいった所の土間に、粗末な椅子とテーブルが三組ばかりならび、奥は台所を経て裏へつきぬけていた。昔とちがった所は、テーブルをおいた場所の一隅に、白木のカウンターらしきものができ、キャラメルやガムのほかに、おでんの鍋がおかれ、ぐつぐつ湯気をたてている所だった。昔はほんとうに、お茶と飲み物ぐらいしかなかったのだ。
「おでん、おいしそうね」と妻は鼻をひくつかせた。「一ついただこうかしら?」
「店の人がかえってくるまでお待ち」と私はいった。「どこへ行ったのかな」
土間のつづきが上り框になって、障子があきっぱなしになっており、奥の間が見わたせた。囲炉裏が切ってあって自在鉤に鉄瓶がさがり、火が燃えている。煤けた繭玉や藁苞に入れたむかごらしいものが、まっ黒な天井からさがり、古ぼけた八角時計が、かったり、かったりと時を刻んでいる。囲炉裏端には、色さめた座布団がおかれ、盆の上に漬物と箸、大ぶりのひびだらけの湯呑みから、ゆっくり湯気が上っている。主はついほんの四、五分前、囲炉裏端を立ったらしい。
「ママ、こっちへ来て服をかわかさない?」
と靖子はいった。
「あら!」と妻は、鼻をひくつかせた。「何だか焦げくさい」
何かが吹きこぼれる音がするのと、子供たちが叫びを上げるのと同時だった。妻は、女の反射

でかまどの所にとんで行き、かかっていた煮豆の鍋の蓋を切った。子供たちはとびちった灰にまみれて、ペッペッと唾をはいていた。

「雑巾雑巾！」と妻は叫んだ。「鍋をおろさなくっちゃ……」

大さわぎして鍋を火からはずしているうちに、今度は囲炉裏の鉄瓶がふきこぼれた。妻は靴をはいたまま、膝でにじって座敷に上りこみ、鉄瓶の蓋をずらせた。

「ほんとに田舎の人ってのんきね」妻は汗のにじんだ顔を手の甲でぬぐって息をついた。

「煮物を火にかけたまま、どこへ行っちまったのかしら」

私たちは、それからテーブルの所へかえって来て腰をおろし、なおしばらく休んだ。二十分ちかくも休んだろうか。——しかし、店の人はかえってこなかった。

「変ねえ」と妻は、ぐつぐつ煮えるおでんを横目で見ながらいった。「ずいぶん長い事お店をほったらかしたまま、るすにするのね」

「〝マリー・セレスト〟みたいだね」と竜彦はいった。「ねえ、パパ」

「なに、それ？」と妻は頬杖をついたまま聞きかえした。「女優の名前？」

「ちがうよ」私は苦笑した。「有名な、海洋事件に出てくる船の名さ」

「どんな事件？」と靖子はきいた。「怪談？」

「似たようなものだな。——マリー・セレスト号は、一八七二年、ポルトガル沖で、帆をまき上げたまま漂流しているのを発見された。見つけた船の船員がのりこんでみると、積荷にも異常

ないし、乱闘のあともないのに、船長と、その妻と、小さな娘と、七人の乗組員の姿が船内から消えうせていた。航海日誌もそのまま、子供用ベッドはつい今まで子供がねかされていたようであり、士官室では、食事の支度ができていて、コーヒー茶碗からまだ湯気がたちのぼっていた。——船長はじめ乗組員は、たった今、大急ぎで、何も彼もやりかけのまま、船を立ち去ったように見えた」

「それで？」と靖子はきいた。「その人たち見つかったの？」

「見つからなかった。——なぜそんなにあわただしく船を退去したか、その理由もとうとうわからないままだった。百年たった今でも、未だに謎とされている」

「気持悪い話……」妻は眉をしかめて、店の中を見わたした。「その話、本当？」

「ああ、本当だ。似たような話は、まだいくらでもある。〝シーバード号事件〟とか〝ジェームス・チェスター号事件〟とか……一九三〇年には、カナダのエスキモー部落の住民三十人が、墓の下の先祖の遺体もろとも、理由もなしに消え失せた事がある……」

「霧が晴れかかってきたよ」と竜彦がいった。「出かける？」

「あたし、やっぱりおでんが欲しいわ」と妻は鍋の方に首をのばした。「お店の人がいなくても、お金をおいとけばいいでしょう」

「私も食べる」と靖子はいった。

「食いしン坊め」私は立ち上りながら笑った。「先へ行って、いい場所を見つけてくる。ほら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.